



日本ラテンアメリカ学会 会 報



2023年3月30日

No. 140

1. 理事会報告
○第174回理事会
2. 第44回定期大会開催案内
3. 第44回総会について
4. 地域研究部会報告
5. 早期キャリア支援セミナーのおしらせおよび地域研究部会開催案内
6. 学術・国際交流
7. 『研究年報』第44号への原稿投稿について
8. 新刊書紹介
9. 事務局から

1. 理事会報告

○第174回理事会

日 時：2023年2月11日（土）

14:30～16:30

場 所：Zoomを使用したオンライン会議

出席者：浅香、磯田（書記）、岩村、宇佐見、大越、奥田、上、岸川、久野、小池、後藤、近田、田村、北條、本谷、舛方、松尾、宮地、村上（理事長）

欠席者：石田

〈審議事項〉

1. 入退会の承認
舛方理事より紹介・提案のあった、入会希望者9名、退会希望者5名の入

退会をそれぞれ了承した。

（3月6日追記）

理事会後、新たに入退会の申し出があり、入会希望者1名、退会希望者2名の入退会をそれぞれ了承した。

2. 託児補助費

近田理事より、託児補助について、先着順で子供1人1回につき1万円、年間10回、対象者は小学3年生まで及び障碍などを条件に理事会が認めた場合と提案された。なお、あくまで補助であり費用の全額を支給するわけではない。審議の結果これを了承し、次回総会で提起する予定である。

3. 学会資料の今後の保存方針

第173回理事会において、過去の学会資料を電子化して保存することが了承されていたため、舛方理事より2社に見積もりを依頼したことが報告された。村上理事長、武田前事務局担当理事および宮地元事務局担当理事（現年報担当理事）、近田会計担当理事と5名で協議した結果、価格および丁寧な対応を鑑み、インフォマージュ社に依頼することが提案された。なお、現段階で重要性があまりないと判断された書類であったとしても後に再評価される可能性があるため、全て電子化することにした。宮地理事の尽力によりカセットテープ資料は電子化されていたため、全て電子化しても予算は超過しないことが確認された。審議の結果これを了承した。

4. キャリア支援

キャリア支援関連として、以下3点の提案があった。

第一に第173回理事会において、三部会合同の早期キャリアセミナーを4月8日に実施することが了承されていた。その詳細について舛方理事より、①対面およびZoomのハイブリッド方式で開催すること、②地域部会の理事・運営委員が一部運営に協力すること、③日本ラテンアメリカ学会が主催、ラテン・アメリカ政経学会が後援団体となること、④新制度への移行期であるため「早期キャリアではないが春の地域研究部会で報告発表をしたい」という希望があれば研究会を開催すること、⑤キャリア支援セミナーの開催と同時に地域部会に関する連絡を会員に行うこと、⑥各地域研究部会を10-11月の1回とし、地域研究部会の合同研究会として早期キャリア支援研究会を4月にするかは再度審議すること、という6点の提案があった。これに対して、村上理事長より、春の地域研究部会での報告を検討していた会員の方には、各地域部会の理事に要望をお寄せ頂くよう周知することが提案された。審議の結果これを了承した。

第二に、早期キャリア研究者に対する支援の一環として、村上理事長より、テニユアなしの早期キャリア研究者および院生会員の会費を5,000円から3,000円に、学部生会員の会費を5,000円から無料にすることが提案された。学部生会員の会費無料化に関しては、昨今の地域研究を取り巻く情勢の変化により、新規の入会希望者が激減する恐れがあるため、入会を促すインセンティブの一つとして導入を検討していることが説明された。その他の

理事からは、学部生会員のみ無料とする場合は年報や会報を郵送しないこと、郵送料として1,000円を徴収するという提案もなされた。また、無償化ではなく、無料のオンラインイベントを開催することや、定期大会時に非会員の学部生がポスターセッションに参加する機会を設け学会活動を広報するという提案もなされた。審議の結果、テニユアなしの早期キャリア研究者、および学籍を有する会員の会費を5,000円から3,000円に減額することを了承し、次回総会で提起する予定である。

第三に、舛方理事より、HP上の「若手研究者」という名称を「早期キャリア研究者」への変更することが提案された。

5. 年報

宮地理事より、年報の優秀論文賞の選出規則改正および執筆要綱に関する変更が提案された。第169回理事会で優秀論文賞の推薦方式を「自薦・他薦可」から「受賞資格のある作品を全て審査対象とする」に変更することが了承されていたが、総会で決議されていなかった。このため、第3回優秀論文賞の受賞対象となる論文は、第2回までと同様自薦と他薦を募ることとし、本理事会終了後に会員に通知する。審議の結果これを了承し、次回総会で提起する予定である。

次に、執筆要項に電子書籍の引用の規定を明示し、次回の会報等を通じて広報することが提案された。審議の結果これを了承した。

6. 国際共同研究奨励費

第173回理事会において、国際共同研究奨励費の企画案を了承していた。これに関して舛方理事より、募集要項

として、1人あたり最大20万円とすること、支援内容は調査・研究遂行に関する費用全般とすること、詳細な応募条件および選考方法が提案された。また設置後は条件を満たす早期キャリア会員に広く告知してほしい旨が伝えられた。くわえて岸川理事より、制度面としては早期キャリア研究者支援の一環であるが、担当者は岸川理事になることが確認された。審議の結果、これを了承した。

7. ラテン・アメリカ政経学会のイベント 広報

村上理事長より、ラテン・アメリカ政経学会のオンライン・ラウンドテーブルについてメーリングリストで広報したことが共有された。他の理事から、毎回理事会の承認を必要とせず、次回からは自動的に広報してはどうかと提案があった。しかし、別の学会のイベント広報のため、毎回承認する、あるいは期間限定で承認した方が良いのではないかという提案もなされた。審議の結果、後者の提案を了承した。

〈報告事項〉

1. 日本学術会議からの依頼（会員候補者の推薦）

村上理事長より、日本学術会議から依頼のあった会員候補者候補について、メール審議を経て2名を推薦したことが報告された。

2. 事務局

舩方理事より、①未納者に会費納入を促したこと、②国際文献社と2023年度以降も契約を更新すること、③J-STAGEで年報第41号が公開されたこと、④2023年2月時点で6名の会員が3年間会費未納状態となっているため3月時点までに事務局からのメール

に無反応であれば除名すること、という4点が報告された。

3. 会計

近田理事より、2023年2月9日現在の全口座の合計残高および第43回定期大会の会計について報告された。

4. 会報

磯田理事より、次号140号（2023年3月末日刊行予定）の企画について報告された。春の地域研究部会の変更点について会報に含めることが確認された。

5. 年報

宮地理事より、投稿のあった5本の査読の結果、全て再投稿となったことが報告された。

6. 定期大会

大越理事より、大会日程（6月3日・4日）、場所（明治大学駿河キャンパス）、申込件数（個別22件、パネル5件）について情報が共有された。今後、採否決定、分科会作成、プログラム作成と準備を進めることが確認された。また村上理事長より、プログラム等も含めて大会に関することは大会実行委員会で決定し、理事会に報告するという手順が確認された。

7. ウェブサイト・ニュース配信

後藤理事（代行）より、前回理事会以降（9月24日～1月31日）のウェブサイト更新・ニュース配信の作業の詳細について報告があった。

8. 学術会議・国際交流

岸川理事より、JCASおよびJCASAの年次総会、JCASのシンポジウムに参加したことが報告された。

最後に、次回理事会開催を2023年5月27日（土）15:00開始とすることを確認して散会した。

*なお、例年理事会が長時間にわたっていたため、メール審議を重ねた結果、本理事会より原則2時間に短縮するための改革を導入した。具体的には、事前に報告事項の詳細を理事間で共有することで説明時間を短縮化したこと、審議事項に関しては提案内容やそれに対する意見を事前に共有することとした。これにより、従来の議論の質を下げることなく、時間の短縮化に繋がったことを明記する。

2. 第44回定期大会開催案内

第44回定期大会は、2023年6月3日(土)および4日(日)の2日間、明治大学駿河台キャンパスにて対面式で開催いたします。既に報告の申し込みは締め切っております。報告を伴わない一般参加については、学会ニュースのメール配信ならびにポータルサイトにて改めて周知します。

本大会では全ての企画を原則として対面で実施しますが、記念講演、シンポジウム、及び一部のパネル企画については、オンライン(Zoom)でもご参加いただけます。URL等の詳細については、プログラムに合わせて公開いたします。

記念講演は、植民地期ラテンアメリカにおけるキリスト教布教ならびに先住民の文化変容の問題に精通するサン・マルティン国立大学(アルゼンチン)のGuillermo Wilde氏をお招きします。また、シンポジウムは「1973-2023:チリから見るラテンアメリカの半世紀とこれから」と題し、若手会員4名の報告を通じて、チリを出発点にラテンアメリカの半世紀とこれからの学際的な視点から展望します。なお、新型コロナウイルス感染症の状況により、オンラインを中心とする形態での開催になるかもしませんことを、ご了承ください。

大会に関する最新情報は、学会ニュース

のメール配信及びポータルサイト(www.ajel2023.blogspot.com)にて随時お知らせいたしますので、ご覧いただければ幸いです。皆様のご参加を心よりお待ちしております。

【実行委員会連絡先】

〒168-8555 東京都杉並区永福1-9-1
明治大学和泉キャンパス研究棟
政治経済学部 武田和久研究室気付
日本ラテンアメリカ学会第44回定期大会実行委員長 武田和久

メールアドレス:

ajeltaikai2023@gmail.com

ポータルサイト:

www.ajel2023.blogspot.com

3. 第44回総会について

2023年度大会(開催校:明治大学)の初日6月3日(土)に、日本ラテンアメリカ学会第44回総会が開催されます。本総会では、下記のとおり会則の変更も審議予定です。会員各位におかれましてはご出席をよろしくお願いいたします。出席が難しい場合は、委任状の提出について追ってご連絡いたしますので、ご対応をよろしくお願いいたします。

☆テニユアを持たない早期キャリア(原則として博士号取得後7年以内の)会員および学籍を有する会員の会費の減額について(案)

現:

付則

1. 本学会の会費は、下記の通りに定める。(2000年6月、2012年6月、2014年6月の総会にて一部改訂)

正会員年額7千円(但し、正会員が学籍を有する場合には年額5千円とする)

改:

付則

1. 本学会の会費は、下記の通りに定める。
(2000年6月、2012年6月、2014年6月、
2023年6月の総会にて一部改訂)
正会員年額7千円(但し、正会員がテニ
ュアを持たない早期キャリアにあるか学
籍を有する場合には年額3千円とする)

☆優秀論文賞に関する会則の改訂について
(案)

現:

第3条(選考対象とする業績)

…以下の条件を満たし、本学会員の推薦
(自薦を含む)を受けた論文とする。

改:

…以下の条件を満たす論文とする。

4. 地域研究部会案内

〈東日本研究部会〉

2022年12月3日(土)13:30から16:40
まで、オンライン(Zoom)で開催され、3
件の研究発表があった。開催告知とリマ
インダーを学会メールで配信した結果、27
名の事前申し込みがあり、当日は登壇者
を含め全体で32名が参加した。討論者
と参加者からは多様な視点からのコメ
ントと質問が寄せられた。一昨年より
定例となったオンラインによる開催に
よって、登壇者も参加者も全国各地
からの参加が可能となり、研究地域、
研究分野を超える活発な議論が行
われた。以下は各報告の概要である。

田村梨花(上智大学)

第一報告

「キューバにおける奴隷の臨床医療と『黒
人』の構築」

発表者: 岩村健二郎(早稲田大学)

討論者: 安保寛尚(立命館大学)

事前に示した要旨について説明し、バ

レーラ『博物学・外科的考察』(1798)で
の「ノスタルジー」について、ヨハネス・
ホーファーによる造語以降、ショイヒ
ツァー、サラフランカに継承されたその語
と概念が「黒人」とその病を同定するた
めにいかに自己領有されたのかを解説し
た。同書は1910年に雑誌記事で書かれ
たのみの幻の書だったが1953年にリ
ディア・カブレラが再出版する。フラン
スのメキシコ出兵時に作られた科学委
員会に属したデュモンはポール・プロ
カノの人類学研究の影響下に入り、デ
ュモンのテキストも20世紀に入り犯罪
人類学者イスラエル・カステジャーノ
スが「発見」し翻訳・再出版する。こ
うした系譜の読解に対して頂いた質疑
を通じて、今後はこれら「黒人」をめ
ぐる医療の言説を、生気論対機械論、
唯心論対唯物論等の相克において、ヨ
ーロッパで自らを含めた「人類」につ
いて構想された認識を分解しながら、
外部としての「黒人」像をどう構築、
実体化したのか、それは後にどう継
承されたのかという議論として再構
成する方向性を示すことができた。

第二報告

「パラグアイにおけるバイリンガル教
育の展開と国民アイデンティティの醸
成」

発表者: 牛田千鶴(南山大学)

討論者: 藤掛洋子(横浜国立大学)

1992年憲法で複文化・二言語国家であ
ることを謳い、スペイン語とグアラニー
語を公用語に定めたパラグアイは、そ
の2年後に本格的なバイリンガル教育
プログラムを初等教育課程に導入した。
本報告ではまず、教育基本法や言語法
をはじめとする法的整備状況を確認し
、パラグアイにおける社会的な二言
語併用状況(ダイグロシア)の特色に
触れた上で、バイリンガル教育の3つ
のモデルを紹介した。そして、四半世

紀余におよぶ同教育の取り組みを通じ、社会的に低位の言語とみなされてきたグアラニー語の復権と、それに基づく国民アイデンティティの再構築がめざされてきたと指摘した。

討論者からは、グアラニー語使用とジェンダー格差との関連性、バイリンガル教育における先住民言語の位置づけといった観点でのコメントがあった。参加者からは、言語運用能力向上に伴う職業選択の拡がりや先住民としての分類に関する統計上の指標、公教育におけるグアラニー語の標準化方法等に関する質問や、現地調査に関する助言等が寄せられた。

第三報告

「フェヘスの短編集における『貧者の文学』」

発表者：宮入亮（上智大学）

討論者：花方寿行（静岡大学）

サンパウロ市郊外出身の作家フェヘス（Ferréz）の短編において「貧者の文学」と見なせる特徴があるかどうかを考察された。貧者が対象にされている「貧者についての文学」と貧者が主体的に語っていると見なせる「貧者の文学」の区別が必要であるとしたうえで、それぞれのカテゴリーに含まれ得る作品に言及し、フェヘスの短編集『サンパウロにシロはいない』（Ninguém é inocente em São Paulo）のパラテキスト上での戦略といくつかの短編を「貧者の文学」という観点で考察した。パラテキスト上では一般的な書籍の書式に従わなかったり、あえて教養的な引用が避けられたりしており、短編のなかには「間違っただけ」言葉をそのまま使い、貧しいという条件においても「創造的」であるという可能性が見出されていることを確認した。討論者からは、貧者という立場はきわめて流動的であ

り、「貧者の文学」という形を設定することの困難が指摘された。質疑応答では、フェヘスがサンパウロ郊外において文化的な活動に関わっているという点で、社会に積極的に働きかけていく可能性のあることが指摘された。

〈中部日本研究部会〉

2022年度第2回研究会

日本ラテンアメリカ学会中部日本研究部会では2022年11月19日（土）、13:30から17:00までオンライン（Zoom ミーティング）により研究会を開催した。参加者は17名で、18:00まで希望者による歓談を行った。報告は3つあり、活発な議論が繰り広げられた。

各報告の詳細は以下の通りである。

浅香幸枝（南山大学）

第一報告

「カポエイラとウンバンダの世界観」

発表者：河村留利

（愛知県立大学大学院）

討論者：古谷嘉章（九州大学）

本発表では、岐阜県土岐市のブラジル新宗教ウンバンダグループの参与観察をもとに、ウンバンダとカポエイラの世界観を明らかにすることを目的とした。ウンバンダは、カトリック、先住民、アフリカ、心霊主義が混淆したブラジル宗教であり、霊媒者が憑依を受けることで悩める人々を癒し、霊的治療を行う。儀礼中に現れる憑依霊「バイアーノス（バイアーノ州の人々）」と「マランドロス（社会の周縁者）」は、カポエイラの世界においても相手を騙す技や超人的な動きを目指す実践者たちの理想像として親しまれている。これらの憑依霊に着目し、彼らのトリックスター的な性質に現れる「両義性」が、両実践における共通項である仮説を提示し

た。討論者からは「ディアスポラ性」を持つウンバンダが日本においても独自の変化を遂げており、狡猾さやずる賢さを表す概念「マランドラージェン」を通した「身体表現」が両実践で重要だという有益なコメントがあった。会場からは他の宗教共同体との比較や政治的観点からの質問があった。

第二報告

「ユカタン・マヤ人にとっての「敵」が意味する存在とは：植民地期初期と21世紀における意味の比較研究」

発表者：郷澤圭介（立教大学外国語
教育研究センター）

討論者：井上幸孝（専修大学）

本報告ではユカタン・マヤ語における「敵」という語について、植民地期初期（16-17世紀）と現代それぞれにおける概念とその変化の理由について説明が試みられた。植民地期初期には戦場での敵をNUUPの語で表した。しかしこの語は友人や配偶者等の緊密なパートナー関係も表し「自分と向き合い対をなす同等な存在」という基本的意味を持つ。そのため戦場の敵に対しても善悪の概念はなかったと考えられる。一方現代マヤ人はNUUPを使わず憎しみや悪を意味する語P'EEKやKISINを用い「敵」を表す。

敵概念変化の理由について、メソアメリカの二元性の考えから戦争を「相反し補完し合う二つの勢力の動き（衝突）」と捉え正当化していた可能性と、カトリック普及により敵を「神と悪魔」のような非補完的な二極対立の価値観のみで見えるようになった可能性が示された。井上会員からはスペイン語のenemigoも時代や文脈により価値観が変化した可能性について等の建設的且つ有益な質問がなされた。

第三報告

Polarización política, populismo y discursos antagónicos en América Latina. Análisis discursivo multidimensional del debate presidencial televisado de Chile (2021), Colombia (2022) y Brasil (2022)

報告者：Arturo Mila（Universidad de
Santiago de Compostela 博士課程/
愛知県立大学大学院）

討論者：菊池啓一（アジア経済研究所）

La política de Latinoamérica se ha caracterizado en los últimos años por el surgimiento de nuevos liderazgos populistas radicales de izquierda y derecha, lo cual ha acentuado la polarización política en el continente.

Partiendo de preceptos de un análisis discursivo multidimensional, la presente ponencia analiza los debates presidenciales de Brasil (2022), Chile (2021) y Colombia (2022), con el objetivo de identificar las principales cualidades del populismo radical y la construcción de la izquierda y la derecha en el continente. Entre los principales hallazgos destaca que las cualidades propias del liderazgo populista radical destaca en figuras como en Gustavo Petro (izquierda), Lula Da Silva (Izquierda) y Jair Bolsonaro (derecha), mientras que el resto de los candidatos se inserta en un esquema de política partidista tradicional y, aunque puedan tener cualidades carismáticas, no destacan como líderes outsider, sino que son a menudo asociados a movimientos políticos contruidos con el tiempo en sus países (José Antonio Kast al piñerismo y Federico Gutiérrez al uribismo, por ejemplo). Se identificaron dos facetas en la construcción del discurso de los candidatos: una asociada al carisma y a la construcción del ideario del pueblo y otra que habitualmente confronta a sus adversarios políticos, más que generar propuestas.

〈西日本研究部会〉

2022年11月26日(土)10:30から12:30まで、Zoomオンラインにて開催され、2件の研究報告があった。両報告者ともにブラジル在住であるため、12時間の時差に鑑み異例の午前中開催となったが、全国各地から11名の参加があり、ルラ次期政権への関心・展望までを含めた活発な質疑応答が行われた。

北條ゆかり(摂南大学)

第一報告

「第二次世界大戦期のブラジルの対日宣戦布告の背景」

発表者：若枝一憲(在クリチバ
日本国総領事館首席領事)
討論者：子安昭子(上智大学)

今次発表では、第二次世界大戦の戦前・戦間期におけるブラジル外交の変遷(中立政策から対日宣戦布告まで)、特に終戦直前の1945年6月に対日宣戦布告に踏み切った背景につき、地理、ヴァルガス大統領の属人性、政権内構図、米国との外交交渉の帰結等の点から説明した。先行研究は、ブラジルも参戦した欧州戦争が終了した後、引き続き米国との協力関係(武器供与や大型融資等)を維持するため、追加的な対日宣戦布告により戦争状態を継続する必要があったと分析するが、報告者は、ヴァルガス大統領が対日宣戦布告によって連合国の一員としての戦時功績を積み重ね、戦後の新たな国際秩序においてより高位を占めようとした、との見方を提唱した。この点、討論者の子安昭子会員の質問に対し、1945年サンフランシスコ会議で、同大統領が会議出席中のヴェローゾ外相に対し、ブラジルの戦時功績と犠牲に基づき安保理常任理事国の地位を求めよう訓令を发出していた史実等を紹介した。

第二報告

RISE AND FALL OF SOUTH AMERICAN SECURITY AND DEFENSE INTEGRATION

発表者：Dr. Marcos Aurélio Guedes de Oliveira (Departamento de Ciência Política, Universidade Federal de Pernambuco, Brazil)

討論者：山岡加奈子(アジア経済研究所)

The end of the Cold War led South America to adopt a strong policy of regional cooperation in order to survive in the emerging international system. The creation of Mercosur in 1991 resulted from cooperation between Brazil and Argentina to consolidate democracy and to bring together South American countries toward economic growth. The Brazil-Argentina nuclear agreement represented a key step in this process. The South American Union created in 2008 represented a step forward to bring all regional nations towards dialogue in development and security. The South American Defense Council was a first step to foster a dialogue among South American countries to protect themselves against an increasingly unpredictable and globalized world. Both regional initiatives failed due to weak institutions and populism. This led Brazil towards BRICS. The Brazilian wish for a Multi-polar international system appeared to become feasible with BRICS. Nevertheless, the impact of a global dispute within UNASUL and between the US and China have led Brazil to step back from its regional project and let the region change to a context that might resemble the one before Mercosur.

5. 早期キャリア支援セミナーのおしらせおよび地域研究部会開催案内

〈早期キャリア支援セミナーのおしらせ〉

日本ラテンアメリカ学会では早期キャリア研究者の研究活動への支援の一環として企画している「早期キャリア支援セミナー」を2023年4月8日（土）にZoomと対面のハイブリッドで開催します。このセミナーは、報告とそれに対するコメントと討論に十分な時間をとったセミナー形式の研究発表機会を会員に提供することで、発表者の論文作成能力の向上を図ることや、複数の困難を抱える研究者同士による横のつながりと交流を促すことを目的としています。

開催時期と開催方法

開催日：2023年4月8日（土）午後

開催方法：Zoomを利用したオンライン
（ハイブリッド）開催

：東京外国語大学本郷サテライト
8階

- ・セミナー後、オンラインと対面のハイブリッドでの交流時間を設けます。

狙い

- ・ラ米学会が主催、ラ米政経学会が後援団体となることで、どちらかの会員でも本セミナーに参加することができ、会員のニーズに応じた議論の場とします。
- ・今回はZoomでの開催として、海外にいる方や対面参加が困難な方の報告や参加も可能とします。
- ・修士論文提出後の新規会員、博士論文を執筆中の方、また博論提出前後にジャーナルへ投稿することを計画している方を対象とします。
- ・発表者は応募時、両学会から希望する討論者を挙げるができます。
- ・応募人数に応じ会員同士の座談会の設置

も検討します。

応募資格

- ・理事会が認める早期キャリア研究者（博士号取得から7年まで）
- ・特に修士論文提出後の新規会員、博士論文を執筆中の方、また博論提出前後にジャーナルへ投稿することを計画している方を対象とします。

〈地域研究部会開催案内〉

新制度への移行期ということで様子をみるために早期キャリアではないものの、3月-4月頃に報告発表をしたいという希望があれば、別途、研究会を開催します。報告を希望される方は2月末までに所属する地域研究担当理事にご相談ください。

6. 学術・国際交流

JCAS2022年度年次集会・ 第12回JCAS賞授賞式参加報告

岸川 毅

2022年11月19日（土）、地域研究コンソーシアム（JCAS）の2022年度年次集会・第12回JCAS賞授賞式・一般公開シンポジウムが、対面（岐阜女子大学文化情報研究センター6階大会議室）・オンライン（Zoom）ハイブリッド方式で開催された。概要を以下のとおり報告する。

1. 2022年度年次集会

年次集会には対面・オンライン双方からの参加があり、仙石学事務局長の司会で議事が進められた。現在JCAS事務局は北海道大学スラブ・ユーラシア研究センターに置かれている（2022年～2024年）。野町素己JCAS会長（北海道大学スラブ・ユーラシア研所センター）の挨拶に続き、仙石事務局長から、過去1年間に新たな加盟組織

はなく現在の加盟数は104であることが報告された。

次に、岡田泰平JCAS運営委員長（東京大学）より、2021年11月から2022年10月までの活動報告が行われ、①年次集会の開催、②オンライン・ジャーナル『地域研究』の発行、バックナンバーのJ-Stage公開、原稿募集、③JCAS賞の選考過程と結果、④地域研究構想部会によるシンポジウムの開催、⑤地域研究学会連絡協議会（JCASA）との協力、社会連携セレクションの実施（16団体を紹介）、⑥今後の活動計画について説明がなされた。

これを受けて参加者より、JCASと研究者個人の関係やJCASとJCASAの関係について質問があり、研究者個人のJCASの活動への関り方や両組織の性格の違いと協力関係を確認するとともに、有効な連携のあり方について意見が交わされた。

2. 第12回JCAS賞の授賞式・講演会

年次集会に続いて、第12回（2022年度）JCAS賞の授賞式および受賞者による講演会が一般公開で実施された。

岡田運営委員長より、各部門の趣旨と選定過程について説明があった（応募総数は33件）。今後、講評がホームページに掲載されるとのこと。次に、野町会長より各作品の紹介がなされ、順に講評および表彰状が読み上げられた。受賞作は次のとおりである。

①研究作品賞（2件）:

- ・五十嵐隆幸（防衛大学校）『大陸反攻と台湾—中華民国による統一の構想と挫折—』（名古屋大学出版会、2021年9月）
- ・梅屋潔（神戸大学）The Gospel Sounds like the Witch's Spell: Dealing with Misfortune among the Jopadhola of Eastern Uganda (Bamenda: Langaa, 2022)

②登竜賞（2件）:

- ・岡野英之（近畿大学）『西アフリカ・エボラ危機2013–2016：最貧国シエラレオネの経験』（ナカニシヤ出版、2022年2月）

- ・程永超（東北大学）『華夷変態の東アジア：近世日本・朝鮮・中国三国関係史の研究』（清文堂出版、2021年10月）

③研究企画賞（1件）:

- ・酒井啓子（千葉大学）「グローバル秩序の溶解と新しい危機を超えて：関係性中心の融合型人文社会科学の確立」（シリーズ「グローバル関係学」全7巻）（岩波書店）

④社会連携賞（1件）:

- ・鈴木玲治（京都先端科学大学）『焼畑が地域を豊かにする：火入れからはじめる地域づくり』（鈴木玲治・大石高典・増田和也・辻本侑生（編）、実生社、2022年3月）。

続いて、上記受賞者のうち4名（五十嵐氏、梅谷氏、岡野氏、程氏）による記念講演が行われた。JCAS賞の詳細についてはJCASウェブサイトを参照されたい。

3. 一般公開シンポジウム

午後には、JCASと岐阜女子大学南アジア研究センターの共催、岐阜県大野郡白川村教育委員会と公共財団法人岐阜県国際交流センターの後援による一般公開シンポジウム「日本と南アジアの新時代～「グローバル」視点による岐阜からの発信～」が開催された。インド太平洋の国際関係を扱う第1部では、南アジア・インド太平洋・日本を俯瞰する基調講演に続いて、オーストラリアからみた対インド関係、インドの外交戦略とクアッドについての報告、岐阜の文化遺産を通してグローバルとローカルの接合を検討する第2部では、白川郷の現状、南アジアからみた白川郷、岐阜のサステイナブル・ツーリズムについて報告が行われた。複数地域に跨る広域圏の全体像の

把握とともに、研究者・実務者双方の視点から検討がなされた点で意義深い議論の場であった。本件シンポジウムの詳細についてはJCASAウェブサイトを参照されたい。

JCASA2022年度年次総会報告

岸川 毅

2022年12月24日(土)、地域研究学会連絡協議会(JCASA)の2022年度年次総会がZoomでオンライン開催された。20の加盟学会のうち19学会が出席した(委任状を含む)。

小森宏美事務局長(ロシア・東欧学会)の司会で、①2022年度事業報告(ニューズレター第16号の発行、日本学術会議学術シンポジウム共催、今次総会の開催の3件)、②同会計報告、③2023/24年度分担金(総会のオンライン開催で会議費等の支出がないため徴収を停止)に関して審議が行われ、それぞれ承認された。

報告事項として、本会細則の変更(事務局の所在地と役割の明記)の説明およびニューズレター第17号への執筆依頼がなされた。

日本学術会議地域研究委員会からの報告については、小長谷有紀委員長が欠席のため、以下の報告が後日事務局に送付された。①学術フォーラム「地球規模の危機に

立ち向かう地域研究」の共催、②「日本学術会議の在り方についての方針」に関する内閣府からの説明(法改正の動き)とこれを問題視する学術会議からの声明。法改正の内容がより明確になった段階でJCASAにも報告される見込み。

最後に、岡田泰平JCAS(地域研究コンソーシアム)運営委員長よりJCASの活動および活動計画の報告(年次集会、オンラインジャーナル、JCAS賞、JCAS「地域の総合知」シンポジウム、社会連携セレクション)があり、加盟組織(岐阜女子大学)による年次集会の実施、JCAS賞の審査方法の変更、シンポジウムの実施方法の変更(登壇者の講演ビデオの事前アップロード)等について説明があった。

以上の各報告を受けて意見交換がなされ、年次総会は閉幕した。

7.『研究年報』第44号への原稿投稿について

『ラテンアメリカ研究年報』第44号の原稿を募集します。締め切りは9月末を予定しておりますが、具体的な日程が決まり次第、学会ニュース等で配信します。若手から中堅、ベテランまで、多くの会員からの活発な投稿をお待ちしています。

奥田若菜(年報編集担当理事)

8. 新刊書紹介

仁平ふくみ

『もうひとつの風景フアン・ルルフォの創作と技法』
春風社、2022年、432頁。(紹介者：高木佳奈 早稲田大学)

本書は、メキシコを代表する作家フアン・ルルフォの「初期作品からのちの文学作品や活動までを全体的に扱う最初の日本語の論」(42頁)である。日本では1970年代から翻訳・紹介され始めたルルフォの作品は文庫本でも入手可能であり、スペイン語文学の読者にとっては身近な作家の一人である。とはいえ、生前に出版された作品が『ペドロ・パラモ』、『燃える平原』と映画の脚本のみというこの寡作なメキシコ人作家について、ラテンアメリカ文学の専門家でもなければ、日本の読者がよく知っているとは言い難い。

本書はルルフォの代表作のみならず、未発表原稿、旅行ガイドに掲載された紀行文、未完の小説の創作ノートといった資料から新たなルルフォ像を見せてくれる画期的な一冊である。また作家自身が撮影した写真の数々が本書を彩り、読者をルルフォの世界へと誘ってくれる。

本書は4部構成となっており、「権力」、「場所の表象」、「実際に起きた出来事のフィクション化」、「語りの技法」がそれぞれのキーワードとなっている。著者はルルフォが実在の土地や現実の出来事を元に「誰も書いたことがない風景を創出しようとした」(6頁)と考え、作品に至るまでの過程や技法を前述の4つの切り口から分析している。

「第I部 権力とラテンアメリカ小説」では、ルルフォが強い関心を示した年代記と権力の関係、メキシコの国民的作家となったプロセス、作品における権力の描写について論じる。「第II部 場所・記録・創作」では、旅行記や都市・田舎を舞台とした作品を分析し、ルルフォがどのように特定の場所を作品化したのかを明らかにする。「第III部 出来事をフィクション化するための試み」では、改稿された短編の削除された部分や、自伝的要素が用いられた

テキストを分析することにより、実際の出来事をフィクション化する手法を探る。「第IV部 語りをういた手法の確立」では、一人称と三人称の語りに注目し、ルルフォの特徴である声を用いた語りの手法を明らかにする。

本書の核となる部分であり、日本語タイトルにも使用されている「もうひとつの風景」を最もよく象徴しているのは、場所について論じた第II部である。スペイン語タイトル *Rulfo: tiempo, lugar y voces* (ルルフォ：時間、場所、声) にも *lugar* 「場所」という言葉が使われている。特に興味深いのは、作家が執筆中であると言い続けながら未完に終わった小説『山脈』の創作ノートを元に、どのような作品が構想されていたのかを推測した「第7章 物語を内包する場所」である。実在の土地をモデルに二つの氏族を描くという断片的な作品のイメージは、『ペドロ・パラモ』とは異なるルルフォの「風景」を見てみたかったと読者に思わせる。

日本語・スペイン語のタイトルの違いについては説明されていないが、ルルフォによって創られた「もうひとつの風景」を構成する要素が、スペイン語タイトルで示された三つの単語であると評者は理解した。著者は「ルルフォは彼らの声が立ち上がってくるような書きことばを創造し、いくつもの時間のレイヤーが積み重なる重層的な場所を、イメージや音という感覚を用いながら書いた」(386頁)と最後に述べている。本書は「時間、場所、声」が重なり合うルルフォの文学について、様々な資料を用いてあらゆる視点から考察している。先行研究でもほとんど言及されていないテキストも論じられており、ルルフォ研究に欠かせない一冊として、国内外で参照されていくだろう。

フェリッペ・モッタ
『移民が移民を考える 半田知雄と日系ブラジル社会の歴史叙述』
大阪大学出版会、2022年、318頁。(紹介者：長村裕佳子 JICA 緒方研究所)

「コロニアにそだち、コロニアに生きて
いる芸術家」として自らを位置づけ（本書
138頁）、生涯にわたりブラジルの日本人
移民の生活を描き続けた画家の半田知雄
は、同時に移民史家／評論家としてもその
名が広く知られている人物である。自身が
初期移民の子どもであり、自らの経験を再
考しながら移民の生活世界をみつめ、それ
を記録、表現しようとしてきた半田の知的
営為の探求とは何であったのか。

本書は、日系ブラジル社会を表象するもの
として視覚され、読まれてきたものの、
その知的営為の全体像がこれまで明らかに
されてこなかった半田の生涯にわたる創作
活動について正面から取り組み、半田がブラ
ジル日本人移民史において試みた叙述の
営みを考察する。著者によれば、「正史」と
される移民史では移民自身の「声」は必ず
しも重要視されてこなかったものであり、本
書は半田の思想を通じて移民が考える「移
民史」に光を当てようとする。それは「移
民史は、だれか一人がかけば、それで事が
すんだというようなものではない」（本書
113頁）という半田の主張とも重なっている。

本書は歴史学的手法に依拠し、思想史と
社会史の交点に位置づけられるものである。
半田の日記、回顧録、自叙伝などをエ
ゴ・ドキュメント論から分析しつつ移民自
身によるナラティブの産出の過程を丹念に
捉えていく。また、半田の絵画作品の分析
にも取り組み、珈琲農園や家族の憩いの場
の農村風景などを描いた作品19点をカ
ラーページで掲載するとともに半田が描こ
うとした移民の姿やそこにみられる彼の慈
しみに満ちた眼差しについて説明される。

第一章では日系ブラジル社会の移民知識

人による集団としての知的営為の活動空間
の変遷、その出版物を丁寧に概観し、そう
いった環境に身を置く半田が1970年刊行
の『移民の生活の歴史』（四六判、797頁）
を執筆した過程を明らかにする。第二章で
は自らの経験に基づいて上記の書を執筆
し、移民の生活を叙述した半田が、晩年、
少年時代の記述を自叙伝としてリライト
し、「私」としての物語を「復権」させよ
うとしていた様子が分析される。

第三章では半田の絵画の分析とともに、
それがいかに日系社会内外で受容され、半
田が〈移民画家〉と呼ばれ、彼の作品が
〈移民絵画〉として表象されるようになった
のかについて検討を重ねる。第四章では
半田が「移民の悩み」として特筆した、戦
後に大きな影響を与えた勝負抗争を含む日
系社会の憂いとは何であったのかを時代背
景の詳細な記述より明らかにする。第五章
では半田の思想の中で重要な位置を占める
文化伝承、日本語、移民心理の問題がいか
に論じられてきたかを考察する。

これまで日系ブラジル社会のテーマに関
する様々な場面でその絵画、著作が繰り返
し注目されてきた半田知雄という人物の全体
像に迫る本書は、ブラジルの移民知識人の
営みを理解するための貴重な材料を提供し
ている。また、移民史の叙述過程をいま一
度検討するための多くの論点が提示され、
移民史を「内側」から理解することの意義
が問われている。移民史とは職業的研究者
や「外側」からのみ観察され、叙述されるも
のではなく、そこには当事者性があり、「私」
と「公」の領域が交差する、いつの時代も
常に動的なものであることに留意して向き
合っていく試みが始められている。

小池洋一、子安昭子、田村梨花(編)
『ブラジルの社会思想 人間性と共生の知を求めて』
現代企画室、2022年、512頁。(紹介者：秋山万里 上智大学大学院)

本書はブラジル近現代における社会思想を体系立て紹介するものである。社会思想はそれが生まれた背景への理解なしに解釈するのは難しい。なぜなら社会思想とは社会現象を捉え、そこから見える課題の克服とより良い社会創造に向けた変革を目指すものだからである。ブラジルの社会思想家は西欧の思想や理念と自らの社会との乖離から、独自の視点でそれを解釈、修正することで、その思想を紡ぎ出してきた。そしてそれが希求するのは社会格差、貧困、排除の力の克服であり、社会正義への追求だった。

本書は全ての章において思想形成過程のみならず、思想が社会にもたらした影響、今日におけるその重要性を体系だって説明している。4つのパートから成る本書は、第I部ではブラジル人、ブラジル社会を読み解くための思想、第II部では低開発克服に向けた国家や経済のあり方を、そして第III部では不平等や構造的搾取の解決を目指す社会運動やその原点となる思想を扱っている。続く第IV部では社会思想の表現方法としての文学、芸術が紹介されている。この本の特徴はブラジルの社会思想を網羅的に解説していることのみならず、コラムや注釈による補足説明、思想家関連年表を用いて社会思想やブラジルに馴染みのない読者にも理解しやすくしていることにある。掲載された思想それぞれは示唆に富むものの、紙面の都合上、第III部を主に紹介する。

ブラジルにおける社会運動の多くは、植民地主義や西欧近代化を通じ社会的排除や差別によって権利を収奪されてきた当事者を中心に展開されてきた。それはブラジルという名が付けられるずっと前からこの地に住む先住民、そして奴隷として連れてこられた黒人たちによる正義を求める行動だった。今年の大統領就任式典でルーラに綬を渡した市民代表にラオニ・メトゥティレがいた。黄色の頭飾りをつけて登場したカヤポ民族の長老は誰よりも長く、誰よりも強く森の大切さを訴えてきた。なぜならア

マゾンに命の源であり、それなしで人は生きられないことを知っているからだ。アブディアス・ナシメントは人種民主主義に異を唱え、その背景に「黒人のジェノサイド」と西洋由来の「科学」の関与を見出した。ナシメントはブラジル黒人の真の解放に向けたプロセスを提示し、また、黒人自身の意識改革の必要性を訴え続けた。シコ・メンデスとマリナ・シルヴァはラテックス採取人の家に生まれた。貧困層を豊かにすることのない搾取構造や、地主による価値のなくなった採取林の売却は彼らを抵抗へと駆り立てた。ゴム採取労働者の権利と正義を求める訴えは自然環境保護、さらには搾取のない社会実現への訴えと展開されていく。社会正義実現のための連帯には価値観の異なるものの声にも耳を傾け時に譲歩が必要であること、そして何より当事者たちによる主体的な行動が社会をも動かすのだと言う知識を皆、経験を通じ獲得していく。シコ・ウィッターケルは多様な立場にいる人々の対話と連帯こそが「もう一つの世界」を生むと確信し、世界社会フォーラムという開かれた空間を用意した。マリナ・シルヴァは今ルーラ政権でも環境・気候変動相を務めるが、大きなミッションを持ち挑むこととなる。それは元来地球の肺が今や二酸化炭素排出地へと姿を変えてきていることによる。アマゾンの森は開発による搾取で破壊と劣化が進み、この地域に気候変動と砂漠化をもたらしている。

VUCA時代を生きる我々は高い不確実性や脅威への煽りからくる不安と日々隣り合わせにある。膨大な情報と目先の問題への対処は物事を深く考える余地すら与えてくれない。本書は物事を単純化し、小手先の対策で完結させようとする思考に警鐘を鳴らし、自らを取り巻く社会を見つめ直す機会と場を与えてくれる。多様性を持ったブラジルだからこそ生み出された社会思想は多くの気付きと知恵を与えてくれる。関係者のみならず、少しでも多くの人に手に取ってほしい。

9. 事務局から

入会・資格変更・退会（第174回理事会
承認：3月6日追加承認含む）

〈新入会員〉

- ・ [REDACTED]
- ・ [REDACTED]
- ・ [REDACTED]
- ・ [REDACTED]
- ・ [REDACTED]
- ・ [REDACTED]
- ・ [REDACTED]
- ・ [REDACTED]
- ・ [REDACTED]
- ・ [REDACTED]

〈種別変更〉

- ・ [REDACTED]
- ・ [REDACTED]

〈退会会員〉

- ・ [REDACTED]
- ・ [REDACTED]
- ・ [REDACTED]
- ・ [REDACTED]
- ・ [REDACTED]
- ・ [REDACTED]
- ・ [REDACTED]

編集後記

はじめに、原稿を執筆して下さった会員の皆様ならびに編集者の鈴木氏に厚く御礼申し上げます。今号より編集担当を引き継ぐこととなり、右往左往してしまっただけで、年度末にも関わらず締切厳守で原稿を仕上げて下さったおかげで、発行に至ることができました。

年末年始には、通常はあまり取り上げら

れないラテンアメリカの政治情勢が大々的に報じられるという、有難いような有難くないような出来事を経験した。まずペルーでは、昨年12月7日にカスティジョが憲法の規定を無視して国会解散を宣言し、国会から罷免された。その後に抗議活動が活発化し、多数の死傷者を出したまま混乱は収まっていない。またブラジルでは、1月8日にボルソナーロの支持者が連邦議会、大統領府、連邦裁判所等に侵入し、一時的とはいえ占拠した。騒動は収まっているものの、ルーラ派とボルソナーロ派の対立は根深く残ったままである。他方、ロシアによるウクライナ侵攻開始から一年以上が経過した今も、情勢は変わらず市民が苦しんでいる。

こうした中で人文社会系の学問は社会にどのような貢献ができるのであろうか（できなければ不要論が強くなってしまふ）と現地調査地から考えを巡らせている次第である。（磯田沙織）

会費納入のお願い

学会会費を未納の方は、下記の郵便振替口座にご送金願います。会費を連続して2年間、無届で滞納した場合は除名となることがあります。なお、納入状況は学会ウェブサイトの「マイページ」で確認することが可能です。

口座記号番号：00140-7-482043

加入者名：日本ラテンアメリカ学会

No.140 2023年3月30日発行
学会事務局
〒183-8534 東京都府中市朝日町3-11-1
東京外国語大学世界言語社会教育センター 舂方周一郎研究室気付
042-330-5261
ajel.jalas@gmail.com